

四季彩樹

執筆・編集

地域ボランティアプログラム「松木日向緑地プログラム」メンバー

発行日 2020年3月

問い合わせ

「首都大学東京ボランティアセンター」東京都八王子市南大沢1-1

Call:042-677-1354 E-mail: tmv-volunteer@jmv.tmu.ac.jp

Twitter: @tmv_volunteer #松木日向緑地 #緑から緑を

Facebookもやっています！

松木日向緑地プログラムとは？

首都大学東京南大沢キャンパスの奥地にある松木日向緑地では、本学ボランティアセンターが運営する地域ボランティアプログラムの一環として、右記の社会課題解決を目的に、学生が主体となった**竹林整備**の活動や、伐採した竹の利活用を通じた**地域交流活動**を行っています。

このボランティアプログラムには、上記のような活動の前後に、ボランティアの意義や社会課題・背景等を学ぶ**事前学習**、1年間の活動を多角的に振り返る**事後学習**があります。しっかりとした目的意識をもち年間の活動に臨むことで、**活動と学習が深く結びつく構造**になっています。

社会課題

環境：里山荒廃による生態系への悪影響

文化：自然を利用する文化及びそこで扱われる技術の伝承が絶たれる

地域：少子高齢化の進行に伴う世代間交流・地域コミュニティの希薄化

大学：豊かな緑地資源に対する学内での認知度の低さ



↑ 事前学習

「なぜボランティアをするのか？」

「活動地域にはどんな課題があるのか？」

などを考え、学んだうえで活動における自身の目標を設定します



↑ 事後学習

「活動の社会的な意義や効果は？」

「目標は達成できたか？」

多角的な視点から1年間の活動を振り返り、その学びを自らの成長へ繋ぎます



緑(環境保全)から
縁(地域交流)を

2019年度 活動記録

春

プログラム外の
学生も参加！

たけのこ掘り(プレ企画)

活動日：4/6、14、20



↑ 参加者の方々が採りやすくなるよう、アシストします

4月6日、14日、20日の3日間、松木日向緑地で「みんなで一緒にたけのこ掘りin首都大・松木日向緑地」が開催されました。地域の小学生やその保護者の方々等が多く参加した他、ボランティアとして参加した私たち大学生は、参加者のたけのこ掘りのサポートを行いました。

今年は筍が“不作の年”とのことでしたが、小さな筍でも収穫を喜ぶ小学生を見たり、「子どもたちがこのような経験ができるのは嬉しい」という保護者の声を聞いたりし、今回のイベントが大人にとっても子どもにとっても良い機会であると感じました！

また、そうしたことから参加者にとって松木日向緑地が身近な場所になっているのだなと思いました。

八王子地域合同学園祭 ★学生天国★

活動日：5/12



↑ 5本の的をよく狙って当てています



↑ 広報紙『緑地新聞』を使い、活動のPRをしています

JR八王子駅前で開催されている八王子地域合同学園祭「★学生天国★」に、本プログラムのメンバー4名が参加しました。

昨年度に引き続き、八王子市内の学生及び市民の方々との幅広い交流を目的に出展した本学ボランティアセンターのテントの中で、今年は新たに、松木日向緑地プログラムによる竹水鉄砲とペットボトルを用いた「的当て体験会」を実施し、大勢の地域の方々と交流しました。的を全部倒して喜んでいる子どもたちの姿を見ることができ、嬉しかったです。

地域の方々から「なぜ、このような活動をしているの？」「どのくらいの頻度で活動しているの？」等、活動に対する質問をいただく場面もありましたが、その質問に答える中で、改めて自分たちの活動の意義や社会課題についての認識を深めることができましたと感じています。

また、ボランティアセンターの学生コーディネーターが学生の立場から情報を発信する『ぼらせん便り』や2018年度の松木日向緑地プログラムの活動を綴った『緑地新聞』を眺めている方々を時折見かけました。様々な形で自分たちの活動を地域の方々にお伝えすることができて、とても嬉しかったです。

サル山水合戦(自主企画)

活動日：8/31、9/7



↑ 保護者の方々にもご協力いただきました



↑ 竹水鉄砲を作るうえで、ピストン用と本体用の竹の組み合わせを探し当てるのは、なかなか大変でした…



↑ 子ども大人もみんなで水合戦を楽しみました♪

「サル山水合戦」は、松木日向緑地で間伐した竹から作る“竹水鉄砲”を用いて行う対戦型のゲームです。地域や親子同士の交流促進や、子どもたちへの自然文化・伝統技術の継承を目的として開催しています。

～準備～

竹水鉄砲作りに加え、試合のルールや当日の流れ、役割分担、道具等、当日に向けた準備は多岐に渡ります。水鉄砲の作り方は、連携団体である「ひなた緑地遊学会」の方に教えていただきました。

試合ルールは、プログラムメンバーで話し合い土台を作ったうえで、近隣の柏木小学校、南大沢小学校、愛宕小学校の保護者及び「ひなた緑地遊学会」の方を含めた会議でアドバイスをいただき、詳細を決定しました。小学生が難しいと感じることや楽しいと感じることを事前に保護者の方から教えていただいたことにより、小学生が楽しめて、理解しやすく、かつ進行がスムーズにいくようなルールを作ることができました。

また、当日必要な道具は、各小学校と遊学会、ボランティアセンターから持ち寄りました。準備の段階から様々な方々にご協力いただき、地域の協力があったからこそ成り立つイベントだと感じました。

～当日～

プログラムの学生を含めた参加者全員を6チームに分けて、サル山水合戦を実施しました。

まずは、学生がサポートしながら、チームごとに竹水鉄砲を作成しました。子どもたちに分かりやすく説明するのに苦労しましたが、子どもたちは夢中になりながら和気あいあいと作っていました。

竹水鉄砲が完成したら、自分の水鉄砲を持って水合戦に出陣します。試合は前後半共に4分、インターバル2分で行い、相手陣地に置かれている“たらい”により多く水を入れたチームが勝ちとなります。試合中は、保護者の方々も子どもたちと共に楽しそうに走り回っており、大人にとっても楽しい時間となっていたようです。

この企画を通じて、地域の方々との交流をさらに深めることができ、今までの自分にはなかった視点や考え方を得ることによって、自身の視野を広げることができました。

参加小学校：八王子市立柏木小学校、八王子市立南大沢小学校、八王子市立愛宕小学校

秋

竹林整備

活動日：10/5



↑ 適切な大きさに竹を切り分けていきます

活動を始めるにあたってまず初めに、理学部生命科学科の加藤先生から、松木日向緑地における竹林の現状や、その管理方法についてお聞きしました。手入れをせず放置された竹林は、日光が入りにくいため植生に悪影響が出ること、倒れた竹で足の踏み場がなくなるため、整備する際には、周囲をよく見て行う必要があることを学びました。

その後、ノコギリで竹を伐採しました。枯れた竹を切るのはかなり大変ですが、青々とした竹を切るのは意外と簡単です。竹を伐採することで過密化していた暗い竹林に光が差し込み、その達成感から活動に対するやりがいを感じました。伐採した竹は、数十センチの長さに切り分けたり、四つ割したりする等、竹炭にするための加工作業を行った後、炭焼きに備え、乾燥させるために縦横交互に並べて積み上げました。

自分で切り出した竹が竹炭として活用され、自然環境の中で循環していくのは、とても嬉しいです。

冬

竹炭づくり・木工体験会

活動日：11/30



↑ クリスマスに向けてリースを作りました

この日の活動では、近隣小学校の子どもたちと一緒に、炭焼き窯に火を入れ、間伐した竹を使った竹炭をつくりました。炭焼きをしている間には焼き芋づくり、竹の間伐体験、緑地の材料を使ったリースやキーホルダー、貯金箱等の工作を行い、お昼には竹と一緒に焼いた焼き芋と保護者の方々が作ってくださった豚汁（緑地で採れたキノコ入り）を食べました。短い時間でしたが、内容が盛りだくさんで、多くの人で賑わう楽しいイベントになりました！

私たち大学生にとっては、身近な大学の自然の中で、普段関わることのない地域の方々との多世代交流したり、子どもの笑顔をたくさん見たり、自分も夢中になって工作をしたりすることができ、とても楽しい活動でした。

また、地域の方々にとっても、自然に飛び込んで何かを作ったり、楽しみながら学んだりすることが、貴重な経験になったと思います。親子や友達同士でのコミュニケーションの機会を提供できた意義ある活動だったと思います。

首都大の緑地の魅力を多くの方々に知っていただく機会にもなり、“緑から縁を”を実感できる日になりました！

下草刈り

活動日：12/8



↑ 徐々に、されど確実に、陽の光が入り込みます

この日は、竹を間伐した場所に生えてきた笹の下草刈りを行いました。植物の多様性の点では、竹の過密化等の次に根笹等の下草が新たな問題になるのですが、作業を通して今までとは全く違った景色になったことに喜びを感じました。

ただ、範囲が広く足場も悪いため、作業は非常に大変でした。また新しい知識や技術、道具が必要になりそうです。これからこの場所がどのように変わっていくのか楽しみです。

里山保全ボランティア体験会(自主企画)

活動日：12/22



↑ 参加者に松木日向緑地についての説明をしています

里山保全活動の意義や、里山が抱える社会課題をより多くの人に知ってもらうことを目的に、首都大の学生及び教職員を対象とした里山保全ボランティア体験会を実施しました。

当日は、準備運動や自己紹介を行った後、実際に緑地に入り、松木日向緑地と竹の伐採方法についての説明をしました。「竹林の理想的な整備状況は、傘を差しながらゆとりをもって歩ける程度」といった丁寧で分かりやすいリーダー学生の説明に他メンバーが感動する等、メンバー間で影響を受け合えることも、この活動の良さだと感じました。

平坦な場所へ移って行った竹の伐採体験では、手本となるプログラムメンバーが改めて切り方を確認し、初めての人にも分かりやすいように説明することを心掛けました。恐る恐る竹を切り始めた参加者の方々も次第に切ることに慣れていき、体験終了の時には、「もっと切りたい!」という様子でした。

最後に、教室内で下記についてディスカッションを行い、里山保全活動に関する考えを深めました。

1. 松木日向緑地が抱える社会課題とは？
2. 里山が抱える社会課題の原因は何か？
3. 課題解決のために私たちができることは何か？

学部や年齢を問わず、様々な参加者がいたことから、各テーマに対して多様な意見を出し合うことができたため、全国の里山の状況・取組についての理解をより一層深めることができました。自分たちの活動の参考になるアイデアもあり、自らの視野がさらに広がったと感じています。

企画の中でいくつかの改善点はありましたが、当初の目的を達成することはできたのではないかと考えています。



参加者の声

- 保全活動に対するイメージが変化した
(手を加えなくてもいい→手を加えることで環境が変わる)
- 間引きされた/されていないエリアの差が印象的だった
- 学生ならではの視点がとても参考になった(施設課の職員)

竹ぽっくり作り

活動日：1/12



↑ 慣れない道具での作業、一層気を引き締めて取り組みました

この日は、竹を間伐した後、その竹を使って近隣の幼稚園に提供するための竹ぽっくり”や春に実施予定の「みんなで一緒にたけのこ掘り」で使用するためのこの目印となる杭をつくりました。竹ぽっくり用としてとても太い竹を切ったのですが、ノコギリを動かしてもなかなか切れず、体力的にとっても大変でした。

大変な思いをして切ったこれらの竹が、他の場所で有効活用してもらえると考えると、とても嬉しく思います。杭作りでは、竹割り用のナタを使い、竹を縦に割ったり、先端を斜めに削って尖らせたりしました。ナタは普段の竹林整備活動では使用しないのですが、慣れない作業ながらも怪我なく作業を終えることができました。ノコギリやナタ等、様々な道具の使い方を学び、その技術を習得することで、自分たちにできることや活動の幅が広がっていくことを今回の活動で実感しました。

今後さらにいろんなことを学び、新しいことに挑戦していきたいと思います。

竹林整備

活動日：2/14



↑ 竹の倒す向きや竹の傾き、そして周囲の状況をよく見て安全に作業をしました

この日が、2019年度最後のプログラム活動日でした。午前中には竹林整備を、午後には事後学習を行いました。

午前中の活動では、春のたけのこ掘りに向けて、
・たけのこが育ちやすいように、竹林に日光が差し込むようにする

・たけのこを掘りやすいように、足場を整える

以上2点を目的に、普段整備している場所とは違う場所で、2人ずつ3組に分かれ、2時間ほど竹林整備を行いました。

伐採した竹は作業がしやすい位置まで運び、枝切り等を行います。私が倒してすぐに、作業の相方が「片付けやすいように竹をあっちへ運びましょうか？」と声を掛けてくれました。その学生にとっては何気ない一言だったかもしれませんが、私はその言葉から「先を読み、相手の心に寄り添える学生が多いな」と、しみじみ感じました。

私は今年で大学を卒業するため、今回が人生で最後の竹林整備になるかもしれません。松木日向緑地プログラムの活動を4年間続けてきた中で学んだ相手への心遣い等、一つひとつのことをこれからの人生に少しでも役立てていきたいと考えています。



↑ 様々な意見が出ました

最も感情が動いた場面

- 『緑地新聞』を読んでいる人に会った時
→「継続は大切だな」と感じた
- サル山水合戦
→自分達の作った水鉄砲で喜んでもらえて嬉しい！
- 体験会で、他のメンバーが緑地についての説明をしていた時
→仲間の成長を強く感じた
- 下草刈り
→活動の効果がその瞬間に現れないもどかしさ
- 前に出会った子どもたちの成長を感じた時
→顔の見える関係が構築されてきた

活動の社会的な効果・意義(抜粋)

①ボランティア自身

- 自らの成長に繋がった
(コミュニケーション力・企画力・調整力等)
- 大学に対する見方や、自らの進路などへの視野が広まった
- 自然環境への理解が深まった

②課題の当事者・活動の対象

- 自然を利用した子どもにとっての居場所づくり
- 地域交流の活性化
- 緑地の認知度向上

③活動する組織に対して

- 里山保全の技術を学生に伝承
- 学生の企画によって大学自体が盛り上がる
- 人手の増加

④地域・社会

- 地域交流の活性化により、子どもを見守る目が増えた
- 里山・緑地の重要性の共有
- 地域・大学の新しい繋がりがつく

オブザーバーの方々より

- 防災への取組を検討してみてもどうか
- 竹炭の利用は地球温暖化解決に結びつく
- 学生は4年で卒業するが、大学(組織)として地域と繋がってれば、学生が入れ替わっても繋がっていられるので活動が続いていく
- 1つの物語としての活動：自然の恵み(タケノコ)
→自然で遊ぶ(サル山水合戦)
→自然で作る(木工体験会)

午前中に行った竹林整備の活動に続いて、昼食休憩を挟み、午後からは事後学習を行いました。この学習は、1年間の活動における自分自身の想いやボランティア活動の効果と意義を多角的に振り返り、他のメンバーと共有することで、ボランティア活動を一人ひとりの学びと成長に結びつけることを目的として実施しています。

2グループに分かれて行ったグループワークでは、まず最初に「最も感情が動いた場面」について振り返り、共有しました。ポジティブな感情についても、ネガティブな感情についても、一人ひとりが様々な瞬間で、様々なことを感じていたのだなと気づかされました。

次にプログラムを通して行ってきた活動の効果や意義について考え、思いついたアイデアを付箋に書いてグループごとに共有しました。その後、効果・意義についての考え一つひとつを、①ボランティア自身、②課題の当事者・活動の対象、③活動する組織、④地域・社会、の4つの対象別に分けて振り返ったのですが、主に①の付箋が多い班と④の付箋が多い班に分かれていました。



↑ グループごとに考えた考えや分類結果を全体で共有しました

そして最後に、事前学習で立てた目標が達成できたか等を宣言し、修了証を受け取りました。

オブザーバーの方々からも学生の振り返りに対して様々なコメントをいただきました。事後学習を通じて、しみじみと活動に対する達成感や自己の成長を感じました。これから松木日向緑地プログラムがどうなっていくのか、今からとても楽しみです。

松木日向緑地プログラム・アドバイザー 加藤先生より



加藤 英寿(かとう ひでとし) 先生
理学部 生命科学科／牧野標本館

関連URL

・世界自然遺産「小笠原」を知る 小笠原諸島の植物
<https://ocw.tmu.ac.jp/courses/15/73>

・『ひなたブック』ご案内
<https://www.biol.se.tmu.ac.jp/hinata/contents.html>

これまでの経緯と松木日向緑地の将来について

私が松木日向緑地の保全活動に着手したのは、2007年に本学の学生達を中心となって緑地の自然を紹介した「ひなたブック」が出版されてからのことです。それ以前から、竹林の過密化や雑木林への拡大が気になっていましたが、日々の忙しさに追われて放置していました。しかし、このまま緑地が荒れていくのを見過ごしては、ひなたブックを編纂した学生達やブックを見て緑地を散策する方々に顔向けできません。とはいえ、私は里山の専門家ではありませんから、最初は手探り状態で関連する文献を読み、同様の大学緑地保全に取り組んでいる金沢大学「角間の里山自然学校」(2009年度終了)に赴き、活動の現場を視察しました。そして、2009年2月から緑地で、竹林整備を試験的に開始。当時は、技術職員や学生、施設課の方々にご協力いただき、翌3月末までに約1000㎡の竹林を適正密度に整備し終えることができました。また、里山活動の幅を広げるため、炭焼きや粉碎竹の堆肥化と、それを用いた農作物の栽培、木登り講習会など、思いついたことを次々に実践。そんなことで私自身の経験知も増えたので、2010年に「自然を探究し、自然と共に生きる知恵や技術を身につける」ことを趣旨とした「ひなたクラブ」を設立しました。しかしながら、積極的にアピールしなかったこともあって(どうアピールしたら良いのか分からなくて)、参加者はほとんど無く、整備した竹林を維持するのが精一杯の状態が続きました。

転機が訪れたのは2014年冬のこと。この年、施設課が設置してくださった緑地掲示板に、ひなたクラブの活動を紹介したポスターを掲示したところ、数日後に相談にきたのが北出進さんでした。北出さんは地域の子供達を相手にサタデースクールなどを開催されており、その一環として、本学の緑地で筍掘りなどの自然とふれあえる体験をさせてあげたいとのこと。そのためには、子ども達が親しむことが出来る竹林を整備する必要があることから、有志の方々を集めていただいて「ひなた緑地遊学会」を立ち上げ、本格的な竹林の整備作業が始まりました。そしてその春、本学で初めての「親子で筍掘り」イベントが実現したのです。加えて技術職員の方にドラム缶製の大型炭焼き窯を作成していただき、遊学会の方々とともに炭焼きやロケットストーブ作りなどの体験会を開催するなど、次第に里山活動が本格化していきました。

さらに2016年には「首都大学東京ボランティアセンター」が開設され、ボランティアコーディネーターとして着任した足立陽子さんから、この活動を取り入れたいとのご相談を受けました。そして遊学会も協力団体として加わって「地域ボランティアプログラム」がスタートし、学生達の参加を期待し続けてきた私の念願がようやく叶ったのです。当初は「荒れていく緑地を何とかしなくては」という気持ちで始めたことが、「豊かな地域コミュニティの形成」という普遍的な課題に繋がるとは、予想もしませんでした。北出さんや足立さんが、市民や学生の方々を結びつけてくださったことが、このような飛躍に繋がったのです。

地味で大変な活動故に、時には参加者が少なかったり、関心があまり広がらなかったりするかもしれません。でも、その活動に意義があると思うなら、めげずに続けましょう。私自身が経験したように、仮に一人になっても地道に続けていけば、いずれ仲間が現れ、チャンスも訪れ、そして思いもしなかった形で波及していくかもしれません。まさにコミュニティ形成の場として、今後も松木日向緑地が様々な人同士を結びつけてくれることを願っています。

加藤先生、ご協力ありがとうございました！